同じ街に生まれ
同じような悪戯をして育ってきた。

よく似た境遇と環境。
自然と重なる生活サイクル。

昔から隣にいるのが当たり前だった。

同じ物を見聞きし
同じ目標を抱いていた日々。

都会を夢見て地元を離れていった友人達
それを見送った数も　然程変わらない。

大きなケンカも　小さなケンカも
何度も繰り返してきたけど
離れる事さえ　出来なかった。

ずっと続くように思えて　危うい均衡。
いつ崩れてもおかしくない平穏。

身を焦がすような恐怖や畏怖も
笑って誤魔化せるようになったのは
いつの頃からだろうか・・・・

■□■

小高い山に守られた街並みは、ほどほどのラインで都市開発を、緩めたような仕上がりだった。
それなりに発達しているが、まだまだ田舎で、古き良き日本だと言われれば、否定は出来ない。
特記するようなものがないのが、売りのような街だが、逆にそれを好んで住む者も多い。
駅や商店街を中心に、山側に行け行く程、民家の間隔が広くなっている。
街灯もまばらな町並みは、家々の明かりが消えるにつれ、更に闇が深まっていく。
月光さえ届かぬ新月の夜。静まり返った夜空には、数多な星が瞬いていた。
燦然と輝く夜空の下で、早々に電気が消えている部屋からは、甘ったるい吐息が零れていた。

「ふあぁ…ンっ…」
静寂の闇の中、シーツの合間からは、あられもない体が重なり合っていた。
生々しい喘ぎ声が零れ落ちる度、熱い吐息や衣擦れの音が混ざり合う。
「あ…っ、たつつんぁ〜、もっとぉ…」
たつつんと呼ばれた青年は、本名を滝ノ上祐輔であり、この街の電気屋さんだった。
少し舌足らずな呼び名は、幼い頃から変わっておらず、何十年も定着した現在に至る。
そして、滝ノ上は熱い吐息を漏らしながら、細身の青年を組み敷いていた。
「嶋田…かわいい…」
嶋田と呼ばれた青年は、自分の両腕を滝ノ上の頭に絡みつかせながら、再び快楽に浸っていく。
慣れた手付きで淫らな姿へ翻弄させていく滝ノ上は、胸元を弄っていた右手で、震えながら小さく立っている乳首を強く捻る。
「あっっ！」
嶋田の体が微かに跳ねると同時に、か細い喘ぎ声が漏れ落ち、淡く漏れる小さな灯かりに可愛いピンク色の突起はさらに赤みを増していった。
絵を描くように指の腹で執拗に弄る滝ノ上は、反対側の乳首を強く吸い上げると、嶋田の声は更に激しくなる。
「ふぁぁ、あっっ」
滝ノ上が左手で内股を探りながらも、更に敏感な場所へ、ゆっくりと手を伸ばしていく。

巧みな指遣いで執拗に愛撫を続ける中、細くて綺麗な首筋に舌を這わせていく。
絡みついてくる太ももを宥めるように撫で回しながら、そのまま形のいい鎖骨や薄い胸元に、唇を落とし続ける。
真っ白な肌に散らばっていく赤い刻印は、所有者の証と変わらず、鮮やかに咲き誇っていった。
「ばか・・見えるとこに、付けんっな」
首筋に吸い付こうとする唇を、軽く押しやった嶋田は、そのまま自分の唇で塞ぐ。
軽く触れるのは一瞬だけで、次の瞬間には、お互いの舌が絡んでいく。
何度も舌を絡めあい、時折強く吸い上げるキスは、どんどん深まっていき、くぐもった声が零れ落ちる。
「んぅっ・・」
どちらのものか分からない程に混ざり合った唾液が、飲み込みきれずに顎へ滴っていく。
熱い下半身を押し付け合いながら、何度も絡め合っていた舌先は、次第に名残惜しげな糸を引きながら離された。
新鮮な空気が美味しくて大きく息を吸い込む嶋田に、滝ノ上も乱れた呼吸のまま胸元に顔を埋める。
少しだけ息を整えてから、舌先で乳首を絡め取った滝ノ上は、可愛い音を鳴らしながら吸い上げると、絡みつく足を紐解くように、中心へ手を差し入れていく。
「っっ、んっっ」
くすぐったいような甘い刺激に、軽く身を捩る嶋田に、滝ノ上は細くて綺麗な太ももを撫でまわす。
快楽の核をわざと避ける愛撫が、ますます嶋田の体を熱くさせ、火照った体には、薄っすらと玉のような汗が滲む。
嶋田は紅潮した頬を更に赤くしながら、僅かに乱れた呼吸で途切れ途切れにお強請りを始めた。
「たっつ…おね、がいぃ…もっっ、焦らすな・・」
明らかに楽しんでいる恋人を軽く睨んだ嶋田は、悪戯っ子のように笑った滝ノ上は、飄々と言ってみる。
「たまにはイイじゃん」
緩慢な刺激ばかりで、ずっと焦れていた嶋田が大きく首を振ると、自分の手を下腹部に伸ばそうとした。
しかし、それを薄く笑いながら素早く阻止した滝ノ上は、嶋田の耳元に軽くキスをすると、反そり立つ性器を軽く握り締めた。
「っっふぁぁあっ…！」
軽く扱かれただけで、先走りした白いミルクを、先端に擦り付けた滝ノ上は、嶋田に意地悪く囁く。
「嶋田の、もう、こんなになってんぞ」
「・・誰の、せいだ…あっあぁぁっんっ！・」
跳ねるように背を反らして善がる姿を、満足そうに見つめた滝ノ上は、更に強く扱き上げていく。